

スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ) 防除対策マニュアル

毎年、被害に遭っていませんか？

今からできる対策があります!!!



近年は、スクミリンゴガイの越冬数の増加とともに生息地域も広がり、被害が拡大しています。

地域ぐるみでの防除対策の実践で被害ゼロを目指しましょう。

令和7年（2025年）1月

佐賀県農業再生協議会

佐賀県

JAグループ佐賀

■佐賀県スクミリンゴガイ対策暦 (ジャンボタニシ)

佐賀県農業再生協議会
佐賀県
JAグループ佐賀

【平坦普通期水稻】

被害防止のポイント ◎圃場の均平化 ◎農薬の適正使用 ◎移植後の浅水管理

時期	5月	6月	7月	10月～
生育ステージ	入水・荒代 → 代かき → 移植 → 移植～3週間 → 収穫			
基本対策	○圃場の均平化 (レーザーレベラ等) 技術力…★★★★★ コスト…★★★★★ ○高低差が大きい場合は、冬期にレーザーレベラ等で整地を行う。	◎圃場の均平化 (丁寧な代かき) 技術力…★★★★★ コスト…☆☆☆☆☆ ◎農薬散布 (移植直後) 技術力…★★★★★ コスト…☆☆☆☆☆ ◎浅水管理 技術力…★★★★★ コスト…☆☆☆☆☆ ○移植後3週間頃まで、浅水管理。 ○本貝は水深4cm以上で活発に活動するため、可能な限り水深3cm以下を保つ。 ○大雨前後は深水とにならないよう堰板を調整する。  浅水管理のイメージ		○冬の期の耕うん (貝を寒風にさらす) 技術力…★★★★★ コスト…☆☆☆☆☆ ○葉のすき込み又は持ち出し 技術力…★★★★★ コスト…☆☆☆☆☆
その他対策	○入排水口への網設置 技術力…★★★★★ コスト…☆☆☆☆☆ ○石灰窒素施用 (春期) 技術力…★★★★★ コスト…☆☆☆☆☆ ○中々成苗の移植 技術力…★★★★★ コスト…☆☆☆☆☆ 毎年被害が多発する圃場や地域	✓高い技術力が必要 ✓必ず裏面の使用方法を確認！	主な対策のポイントは裏面に記載	○石灰窒素施用 (秋期) 水温17度以上(湛水) 技術力…★★★★★ コスト…☆☆☆☆☆
『地域ぐるみ』で ○卵塊の駆除や貝の捕殺 ○水路の冬期泥上げ（貝を寒風にさらし越冬率を低減）等を実施				

※農薬を使用する場合は、必ず最新の登録情報を確認し、登録内容を遵守して使用しましょう。
※スクミリンゴガイの被害軽減には、個人の対策に加え、集落や地域ぐるみでの対策が効果的です。地域で話し合い、被害ゼロを目指しましょう。

～ 田植後のこまめな田まわりと声かけで、地域のジャンボタニシ被害ゼロへ！ ～

【薬剤防除】 ※令和7年1月28日時点の登録内容から抜粋（防除の際には、最新の情報を確認ください）

農薬名 (有効成分名)	使用量 (kg/10a)	使用時期	使用方法	有効成分の 総使用回数
スクミノン (メタアルデヒド)	1～4	収穫60日前まで	散布又は無人航空機による散布	2回以内
スクミンベイト3 (磷酸第二鉄)	2～8	発生時	散布又は無人航空機による散布	-
パダン粒剤4 (カルタップ)	60～100 g/育苗箱	播種前 または 移植当日	移植当日に苗の上から均一散布	1回

【注意点】

- 魚類等に影響がでないよう散布後7日間は落水、かけ流しは行わない。
- スクミノン等（メタアルデヒド剤）は、薬剤の残効が数日程度しか期待できないため、**多発生圃場や大雨等で貝の流入があった場合は追加散布が必要。**
- 毎年被害が多い圃場や地域では、2回防除（移植直後と約1週間後）を実施する。

【石灰窒素の使用方法】

※人体に影響があるため、施用時は、手袋・マスク等を必ず着用する。

春 期



秋 期 （※裏作がない圃場）

- 水稻収穫後、水温が17℃以上の時期に、3～4日間湛水を保った後、石灰窒素を散布し、さらに3～4日程度湛水（4cm以上）する。
- 窒素を含むため、次作の施肥量を減らす。

【注意点（春期、秋期共通）】

- 魚毒性が高いため、石灰窒素処理後は止水し、排水路への流出を防ぐ。**
- スクミリングガイに適用のある石灰窒素を用いる。

農薬登録を確認！！

○冬期の耕うん（貝を寒風にさらし越冬率を低減する）

- ・大半の貝は、地面から深さ6cm以内で越冬することから、圃場条件を見ながら耕うんの深さは6cm程度で行う。
- ・未発生圃場への貝の持ち込み防止のため、トラクターに付着した泥は丁寧に洗浄する。

○冬期の水路の泥上げ

- ・用水路での発生が多い場合に地域全体で実施する。
- ・殺貝効果が高まる厳寒期（1～2月）に実施する。
- ・掘り上げた水路の泥は、未発生圃場に持ち込まない。

○生物的防除（天敵の活用）

- ・佐賀県内では、地域ぐるみの取組として水路へのスッポンの放流を行っている地域もある。
- ・天敵の導入は、貝密度を著しく低減できる場合もあるが、未分布地では生物多様性の観点から問題となる可能性があるため、地域に生息する在来種を活用する。



写真：粒状石灰窒素
(デンカ株式会社提供)

【問合せ先】

- ◎対策技術で不明な点は、各地域JA事業所又は地域農業振興センター普及課等へお問い合わせください。